



GREENable

サステナブルな価値を創造するブランド“グリーンナブル”の構築について

岡山県真庭市・株式会社阪急阪神百貨店・隈研吾建築都市設計事務所

自然と共生する「当たり前」の暮らしが息づいています

私たちが暮らす、岡山県真庭（まにわ）市。

このまちでは、使われないまま森に放置された木材を活用したバイオマス発電所があり、作られた電気は地域の小学校で使われています。

田畑では野菜くず等の生ゴミをバイオ液肥に変換し、肥料に使用する環境保全型農業に取り組んでいます。また、瀬戸内海でとれる牡蠣の殻を土づくりに活用した米やワインぶどうの栽培がおこなわれています。できたお米も学校給食で子供たちに食べられています。

このように、私たちのまちでは、これまで不要だったものを活用し、環境の再生と地域経済の活性化に取り組んできました。

これからは、もっと多くの人といっしょにサステナブルな社会、自然と共生する「当たり前」の暮らしを作っていきたい。
私たちの取り組みはここから始まります。

■真庭市はSDG s の取り組みを進めています

真庭市は岡山県の北部にあり、2005年3月31日に9つの町村が合併して誕生したまちで、東西に約30km、南北に約50km、総面積は828km²と岡山県の11.6%を占め、全国で58番目に広いまちです。面積の79.2%を森林が占める典型的な中山間地で、古くから木材の産地として知られ、素材生産から木材加工、流通まで体制が整い発展してきました。現在は、従来の木材利用に加え、木質バイオマス発電やCLT（直交集成板）など多彩な利用促進を図り、持続可能なまちづくりを行っています（詳細はP19、20）



地域循環共生圏から生まれたコミュニティブランド

サステナブルな社会の実現のために、環境省が進める地域循環共生圏事業をきっかけとして、地域・ファッション・建築・行政といった多様なプレイヤーがつながり、新たなコミュニティを立ち上げました。

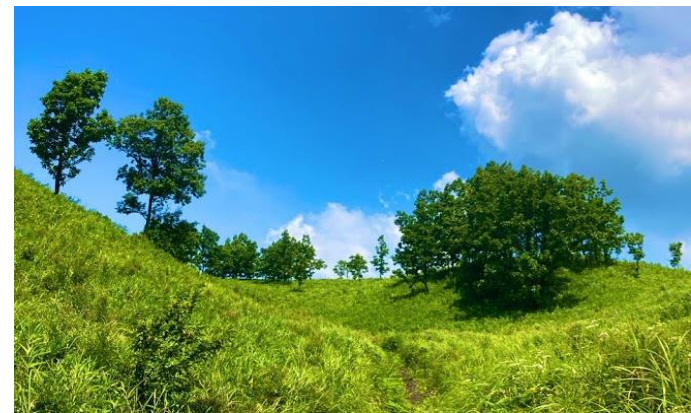
世界的なコロナ禍という大きな価値観の変化や環境問題への意識の高まりなど、さまざまなタイミングと人の縁が結ばれて、このコミュニティは誕生しました。

特に、都市から地方への「人の流れ」が生まれつつある現在、地方の豊かな自然環境や歴史性といったものに光が当たり出しています。

地方から発信するコミュニティブランド、
“GREENable（グリーンナブル）”が蒜山高原から誕生します。

■ ローカルSDGs = 地域循環共生圏

「地域循環共生圏」とは、各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方です。この考えは、農山漁村も都市も活かす、我が国の地域の活力を最大限に発揮する構想です。私たちは、この持続可能な地域づくりを通じて、環境で地方を元気にするとともに、持続可能な循環共生型の社会を構築していきます。（詳細はP21）



“サステナブル”をもっと身近に

真庭市と(株)阪急阪神百貨店は共同で新たなサステナブルブランド“GREENable（グリーナブル）”を立ち上げます。

すでに世界には多くのサステナブルブランドが存在しますが、“GREENable”が目指すのは“サステナブル”を気負わずにもっと身近なものにすること。

遠い国のお話でもなく、知らない人のお話しでもない、ふるさとが育んできた自然環境と人と文化との出会いから始まる。

“GREENable”は、様々な体験を通してサステナブルを実感できる、そんなブランドを目指しています。

■ローカルなファッション協定を目指します

“GREENable”はフランスのケリンググループが発表した「環境のためのファッション協定」と同じように科学的根拠に基づく目標を設けた活動を活用し、地球温暖化の阻止、生物多様性の復元、海洋汚染の防止に取り組めます。更に特徴的なのが、蒜山地域の自然再生活動への参画や地域の文化を活かした製品づくりなど、その取組みの可視化・地域への還元に重点を置いていること。サステナブル+ローカルSDGsを体現するブランドとして、唯一無二の存在となります。（詳細はP22）





GREENable

誰もが”サステナブル”を体感できる場所を

サステナブルの価値をより多くの人に知ってもらうために、
観光文化発信拠点施設”**GREENable HIRUZEN**（グリーンナブルヒルゼン）”
が岡山県真庭市蒜山（ひるぜん）高原につくられます。

この施設の中核となるのは、建築家の隈研吾氏が真庭産CLTを使って
設計監修した「CLTパビリオン」で、東京の晴海で一度活用された後に、
蒜山高原に移築するものです。

コンクリートの建築と異なり、移築できるのは木造建築ならではの。
脱炭素・サステナブルな建築として、また、都市と地方との資源・文
化の交流を表すものとして、ブランドの象徴となる建物です。

■建物のアップサイクルに取り組みます

真庭市は木材のまちであり、木材の新たな活用方法としてCLT（直行集成材、Cross Laminated Timber）の利用にも積極的に取り組んでいます。CLTは木造による中高層建築を可能にする建材として、世界的にもその活用が注目を集めている素材で、真庭市に本社を置く銘建工業(株)が国内トップシェアを持っています。2019年9月、三菱地所(株)は、隈研吾建築都市設計事務所と連携し、真庭産のCLTを利用した。東京都中央区晴海に『CLT PARK HARUMI』を建築し（詳細はP23）、CLTの魅力と木材の文化・情報を約1年にわたり発信しました。そして、2021年7月、その建築物が真庭市蒜山に移築され、サステナブルを発信する象徴的な施設として生まれ変わります。（詳細はP24）



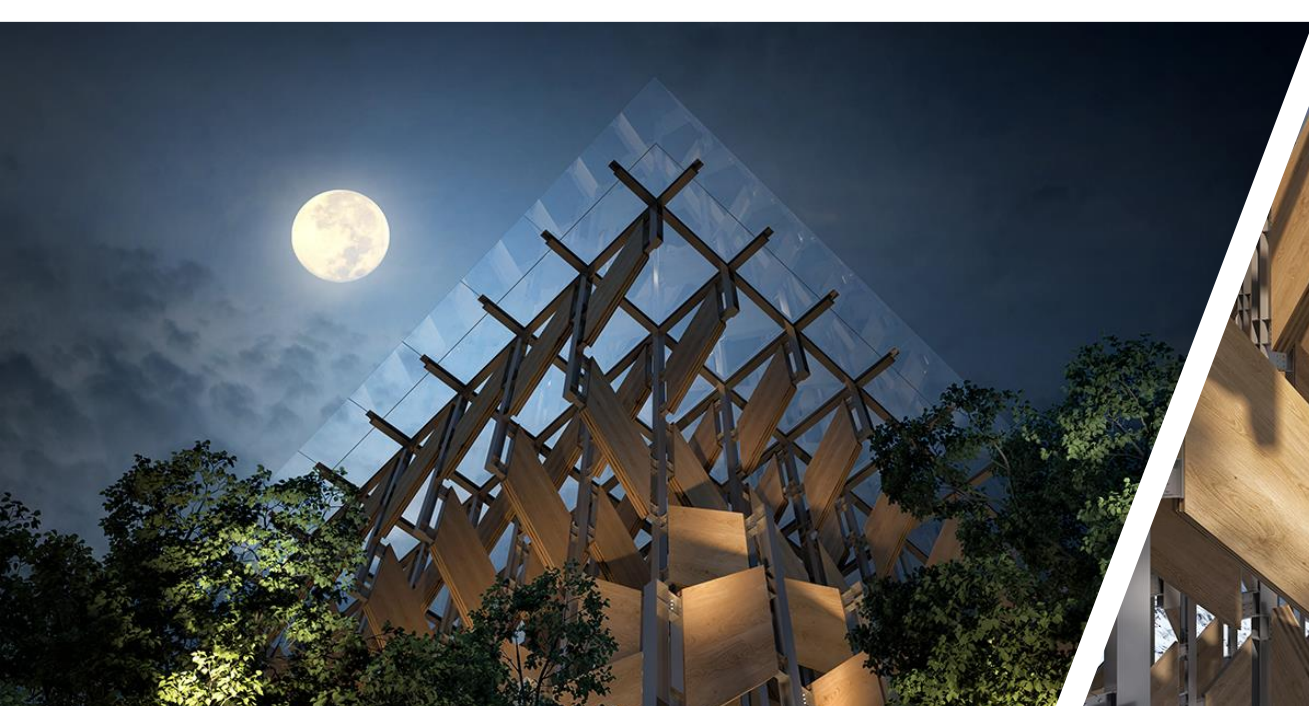
隈研吾氏がこの建物に込める想い

「この施設は奇しくも新しい時期のコロナの建物というふうになってしまいました。都市から地方への移築や、木造や半屋外のCLTパビリオン棟などコロナ後の自然との近さや風通しの良さとか、そういう事のテーマ性を持っている建物です。ぜひ、真庭に来て、この施設の持つメッセージ性、それから、施設の中や地域に広がるサステナブルについて感じていただけたらと思います。」

私たちはこの建物に込められた“想い”をもとに、この場所から、サステナブルについて発信していきます。

■CLTパビリオンの愛称について世界公募を実施します

今回真庭市では“**GREENable**”を世界に発信し、多くの人にこの考え方を知っていただけるように、また、この施設に親しみを持っていただけるように、施設の中でも象徴的な建物である「**CLTパビリオン**」の名称を世界公募します。この建物は**CLT**と鉄骨を編むように組み合わせて**CLT**でできた木の葉が、スパイラル状に空へ向かって舞い上がるイメージの半屋外空間です。光を取り入れつつ雨風を防ぐために、**CLT**のパネルとパネルの隙間を超高透過なテフカ（高機能フッ素樹脂フィルム）でできた凧のような形状の膜でふさぎ森の木漏れ日のような光の状態を創造しています。使用した**CLT**は岡山県真庭市産のヒノキを材料としており、この度、東京・晴海から真庭市・蒜山に移築されます。（詳細は p 25）



“サステナブル”に感性（クリエイティビティ）を

多くの企業が“GREENable”のコンセプトに共感しています。

ただモノがあれば伝わるわけではない。だからこそきちんと、そして美しく伝える必要がある。

環境とファッション、そして、国立公園蒜山での自然共生のライフスタイル、ただ物を買うだけではなく、思想や体験も含めて、ここ蒜山から発信していきます。

■サステナブルに取り組む企業との連携を進めます

多くのサステナブルなブランドの課題は、その取り組みを伝える手段・場所が限られるという点でした。私たちは、サステナブルをコンセプトに掲げる施設を作り、そこにサステナブルなプロダクト・サービスを集めることで、取組を消費者に伝えるお手伝いをします。

さらに、連携している(株)阪急阪神百貨店においても、阪急百貨店うめだ本店において、サステナブルを掲げた売場を2022年に設け、そこでもサステナブルなファッションを展開する予定です。都市と“GREENable HIRUZEN”（地方）で連携したコンセプトの表現、ブランド展開、相互誘客（＝地域循環共生圏の構築）によって、都市集中と環境という2つの大きな課題に対峙していきます。（詳細はP26）

GREENable 連携企業

※2021年2月22日現在

地域の資源を活かしたサーキュラー・エコノミーを実現。これまで価値の無かったものに、新たな価値を見出すことで、サステナブルな暮らしを提案する企業と連携していく。

なお、ここでは公表可能な企業名のみ記載し、現在、連携協議中の企業については記載していない。ここに記載のある企業以外にもアパレルメーカーをはじめ、各種企業が参画を検討している。

環境省／グッドライフアワード

「環境と社会に良い暮らし」の実現を目指し、環境省が提唱する地域循環共生圏の理念を具現化する取組を表彰するプロジェクト。



阪急阪神百貨店

2022年に阪急うめだ本店に、サステナブルフロアがOPEN。GREENable HIRUZENと連携



一連携の考え方ー

国や企業との連携による真庭からの発信力の強化

ECOALF／三陽商会

全てのアイテムを再生素材や環境負荷の低い天然素材のみで作っている、スペイン生まれのサステナブルファッションブランド



Johnbul／rebear by Johnbul

在庫商品を布にまで分解し、余った布などと組み合わせ新たなプロダクトを開発することで、在庫廃棄を減少させる取組み



一連携の考え方ー

真庭で取り組む循環型社会と親和性の高い、ゴミを資源にし、それらを活用した商品化を行う企業を選定

FOOD TEXTILE／豊島

廃棄食材より染料を抽出し、衣類やバッグなどに用いることで、サステナブルなファッションを提案



yukimidori

真庭に多く植生する黒文字。間伐した黒文字から抽出したオイルを化粧水やアロマに展開する



美作ビアワークス

真庭のクラフトビール醸造所。蒜山産のオリジナルビールの開発を進める



一連携の考え方ー

地元の農作物や自然資源を活用した商品開発を進める

自然保護活動を“作業”から“楽しめるアクティビティ”に

国立公園蒜山の豊かな自然。ここには、人と自然が共に育む里山や草原などの生態系がたくさんありました。

しかし、今では人の手が入らなくなり荒廃した自然が増えてきました。一度失うと二度と元には戻せないかけがえのない自然環境が蒜山高原には数多くあります。

人と自然が共に生きる関係性を回復するために、絶滅危惧種とその生息地を守るために、私たちは地域の自然保護活動もアップデートし、自然の守り手を増やしていきます。

これまでの“自然保護活動”から“楽しさのあるアクティビティ”に。観光客でも自然保護活動に参加することができる体制を作ります。

■新たな自然再生アクティビティメニューを創ります

多くの自然保護活動の課題は、「自分事ではない、自分がやらなくてもいい、自分がやったところで特に何も変わらない。」といった関心の薄さや、「きついし、別の事をしてたほうが楽しい」といった楽しさの要素の欠如にあります。

私たちは、蒜山のフィールドを活用して、自然保護活動が“単なる作業”で終わる状況をなくします。

観光客や初心者でも取り組めるような“楽しさ”のある、また、自然に対する知識を深められるような“学び”のある、さらには、きちんと“自然保護”のエビデンスがある、アクティビティメニュー作りを行っていきます。（詳細はP27）



“自然再生”を“根拠あるもの”に

“自然再生”で大事なことは、自然の声を聞くこと

そのためには、しっかりとしたモニタリング体制の構築が大事です。さらにはその結果に応じた、自然再生活動が行われる実施体制の構築も必要になります。

蒜山では自然再生協議会を設立し、科学的な知見を活かした自然再生事業を実践します。

自然を守るからこそ自然の恩恵を使うことができる、私たちは、そんな地域を目指します。

■自然再生協議会を新たに設立します

自然再生において最も大事なことは、自然の営みを最優先し、自然のゆらぎ（不確実性）を踏まえた、その時の状況に応じて、人の手を加える、順応的な方法で管理するということです。蒜山で行われる自然再生についてはモニタリング（現状把握）や自然再生の目標、事業の実施手法について、多様な人材を活用しながら、検討を進めていきます。

現在、そのための組織として、新たに自然再生協議会の設立を目指しています。

また、自然再生を持続的なものにするために、“GREENable”の協賛企業の協力や利益の一部を自然保護の事業に充てるなど、経済的にもしっかりとした体制で持続可能な自然再生事業を作り上げていきます。（詳細はP28）



補足資料

真庭市のこれまでの取組み（里海米の事例）

瀬戸内海では、養殖した牡蠣の殻が廃棄物として問題になっていました。

この牡蠣の殻を土づくりの資材として真庭の田んぼに施して育てたお米が「真庭里海米」です。里山のミネラル豊富な水が美味しい牡蠣を育て、その殻が里山に戻って丈夫な稲を育てる。森里川海連携をテーマにした、まったく新しい環境保全型農業の提案です。海洋プラスチックごみの9割は河川に由来すると言われています。だから、旭川の源流部に暮らす私たちこそ、海の問題に関心であってはいらないと考えています。

真庭市では、JA岡山県グループ、日生湾漁協協同組合、おかやまコープなどと連携し、海のゆりかごと呼ばれるアマモの保全活動に参加しています。この活動をきっかけとして生まれたのが、「真庭里海米」で、現在真庭市産「きぬむすめ」と産地を蒜山高原に限定した「あきたこまち」の販売が始まっています。このプロジェクトは、SDGsの具体的アクションとして、環境と経済が調和した農業の実現を目指して開始したもので、環境省が進める「つなげよう、森里川海プロジェクト」とも連携しています。



真庭市のこれまでの取組み（蒜山の酪農の事例）

自然と共生する“当たり前”の農業が息づいています。

一般的なホルスタイン種よりも小柄で、人懐っこい目をした乳牛・ジャージー種。日本の乳牛の1%しかいないジャージー牛の半数が蒜山高原で暮らしています。濃厚で、 β カロチンが豊富で黄色かった色をしたゴールデンミルク。真庭の子供たちは、毎日の給食でこの牛乳を飲んでいきます。

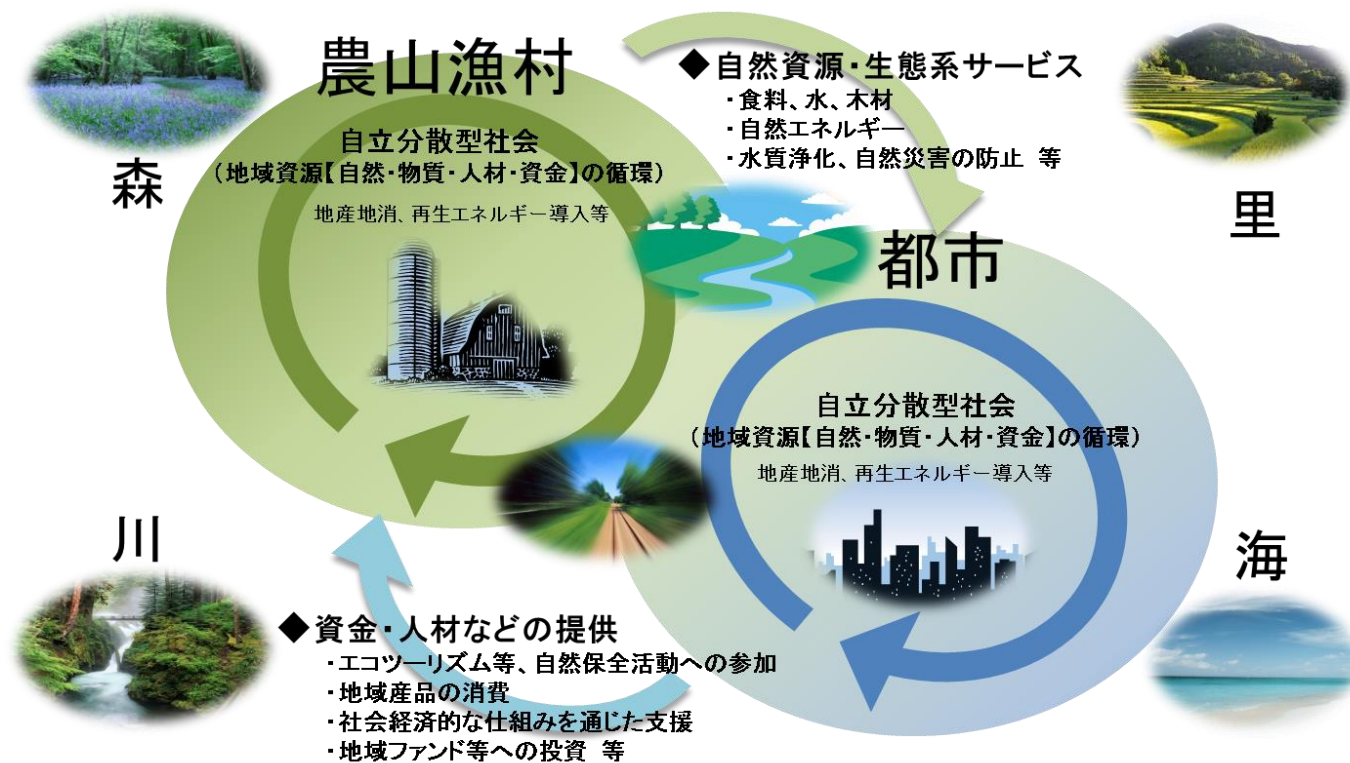
この乳牛を育てているのが蒜山高原に広がる牧草地。ですが、輸入飼料に頼る日本の飼料自給率は、わずか25%。その土地の牧草を食べて育った牛の乳を飲む－真庭で当たり前のことが、贅沢な体験になっています。

自然と共生する“当たり前”の農産物を味わってほしい。 “GREENable”の願いです。



地域循環共生圏とは？

各地域が、地域資源（自然資源・経済資源・人的資源等）を見つめなおし、その資源を持続可能な形で利用するとともに、他地域と資源を補完しあいながら、環境・経済・社会の統合的向上を目指す、という地域づくりの考え方です。



この考えのもと、「地域循環共生圏ビジネス」を進めることが、結果として地域活性化に繋がり、更には、脱炭素社会、循環経済、分散型社会への移行にもつながると期待されます。

■あらゆる観点からイノベーションを創出 ■幅広いパートナーシップを充実・強化

“GREENable”とは？

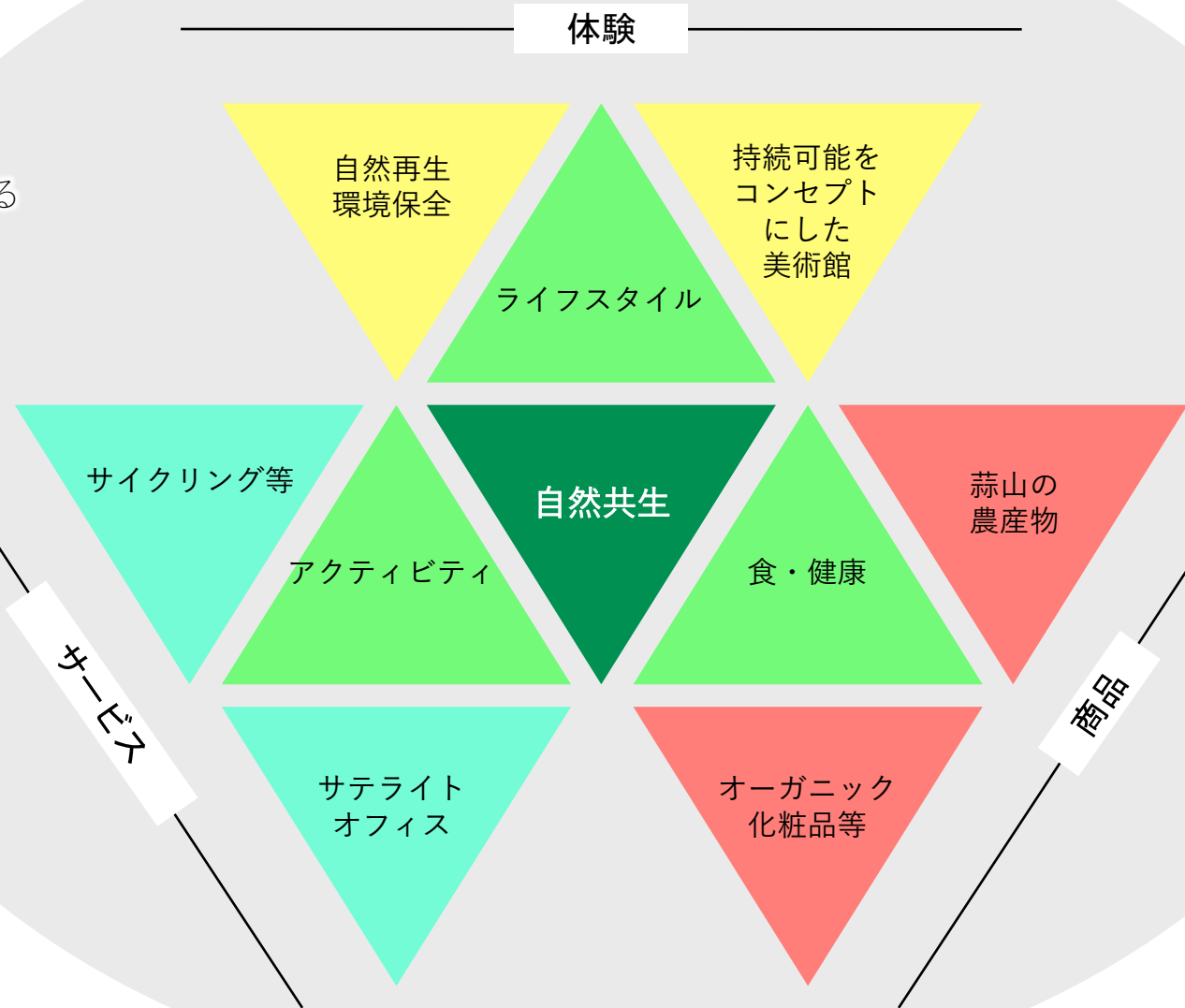
自然共生を軸として、
自然環境への負荷を減らしながら
自然を満喫する体験＋ウェアなどの提案

環境へ配慮した心地いい暮らしを提案する
様々な食品や、身の回りの品

森から人へ、資源を無駄なく利用する
蒜山の取り組みや持続可能性を
可視化する、体験メニューの提供

“GREENable”は、
アウトドアブランドでも、
ライフスタイルブランドでも、
イベントブランドでもなく、

自然共生という価値に共感する
世界中の企業と連携しながら、
自然と暮らしの距離を近づける事業を
蒜山高原を中心に行っていきます。

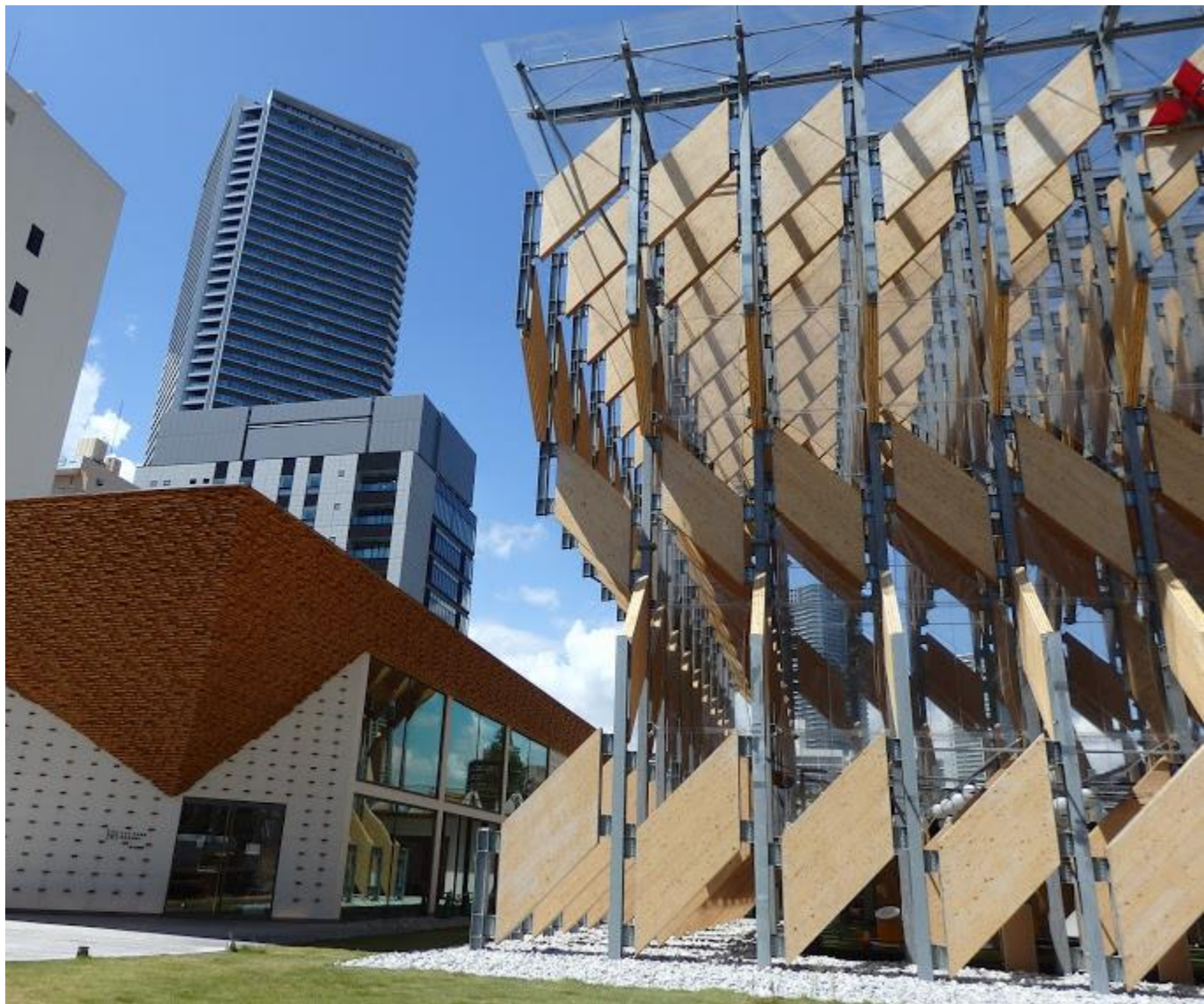


「CLT PARK HARUMIプロジェクト」とは？

“CLT PARK HARUMI”は東京都中央区晴海で岡山県真庭市から提供されたCLT材を用い、隈研吾建築都市設計事務所が設計監修し、三菱地所グループが施工した施設です。2020年秋までの約1年間にわたり、CLTの魅力を伝え、文化、情報を発信する拠点として運用されました。

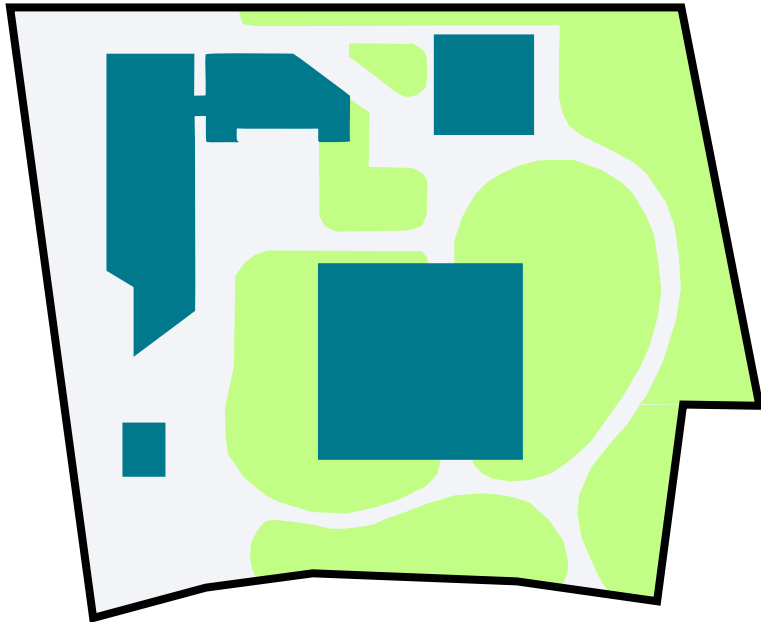
晴海での運用後の2021年には真庭市の蒜山地域に移築され、新たに、“GREENable”のコンセプトである持続可能性を象徴する施設として活用されます。

この建物は木材の新たな活用方法として、さらには建築物のアップサイクルとして、移築可能でサステナブルな構造システムを実現することで、持続可能な未来を発信していきます。



新設される拠点施設 “GREENable HIRUZEN” とは？

“GREENable HIRUZEN”は蒜山高原の拠点施設として“GREENable”のコンセプトである自然共生を表す施設です。施設は、拠点施設の象徴的建築物である「CLTパビリオン」を中核として、隈研吾氏の建築作品をはじめとするサステナブルな現代アートを展示する「ミュージアム」、サステナブルな暮らしを提案する「ショップ」、国立公園蒜山の観光情報の発信と自然・文化資源を活かした体験メニューの提供を行う「ビジターセンター＆サイクリングセンター」から構成されます。



パビリオン名称の「世界公募」について

項目	内容
応募資格	どなたでもご応募いただけます。
募集期間	令和3年2月22日（月）～3月31日（水）午後11時59分 ※日本時間
応募方法	WEB上にティザーサイトを開設し公募します。（ https://www.greenable-hiruzen.co.jp ）
選定方法	審査委員会にて審査・選定を行います。
賞	最優秀賞1点、優秀賞3点
結果発表	オープン前にティザーサイト上、広報誌等で発表します。（日時未定）
応募愛称の 取扱い	・応募者は、愛称に関わる一切の権利（著作権法第27条及び第28条に定められる権利を含む）を無償で真庭市に譲渡するものとします。 ・応募者は、応募愛称に関して著作権者人格権の行使をしないものとします。 ・応募者は、応募にあたって第三者の権利を侵害しないように十分に配慮してください。 ・愛称使用に関する一切の権利は、真庭市が保有するものとします。
その他	・応募は1人何作品でも可能です。 ・個人情報 は 厳重に取扱い、本募集に関する目的のみに使用します。 ・選定された方の名前はホームページ等で公表させていただきます。 ・公共施設の名称として不適切なものや、複雑な表現のものはご遠慮ください。
お問い合わせ先	真庭市産業観光部産業政策課 〒719-3292 岡山県真庭市久世2927-2 電話：0867-42-1033/FAX：0867-42-3907 メール：sangyou@city.maniwa.lg.jp

※なお、市役所のHP（<https://www.city.maniwa.lg.jp/soshiki/40/39754.html>）にも応募詳細を掲載しています。

企業連携について

“GREENable”への参画は以下のような取組みについて実践している企業もしくは、これから取組みを地域事業者と共に進める企業について展開を進めることを予定しています。

	大項目（以下の項目をひとつでも満たせばGREENable認証）	参考事例
☐	これまで価値の無かったものの価値を与える仕組み又は商品	・廃棄される蛎殻を土壌改良材にして生産（真庭里海米） ・廃棄された食材から染料を抽出し、商品を開発する（FOOD TEXTILE）
☐	生物多様性の保全・発展に寄与する仕組み又は商品	・地域の木材や草資源を使用した製品（木工品やクロモジ製品等）
☐	気候変動に対して直接的又は間接的に寄与する仕組み又は商品	・化石燃料の使用を減らすような製品（マイボトル等）
☐	海洋の保護に直接的または間接的に寄与する仕組みまたは商品	・海洋プラスチックゴミからアパレル商品をアップサイクル（ECOALF）
☐	アップサイクル（再生素材）を活用した仕組み又は商品	・在庫商品を分解し、オリジナル商品を製作（rebear by Johnbul）

	小項目（以下の項目を3つ以上満たせばGREENable認証）	
☐	CO2排出量削減に貢献する仕組み又は商品	無農薬・減農薬・有機栽培の国産農畜産物
☐	（製造工程における）使用水量の削減に貢献する仕組み又は商品	再生可能エネルギーの活用
☐	（製造工程における）水質汚染削減に貢献する仕組み又は商品	自然共生の暮らしに必要なアイテム
☐	自然環境の維持又は保全に貢献する仕組み又は商品	ターゲットペルソナの嗜好に合致する仕組みまたはサービス
☐	大気汚染削減に貢献する仕組みまたは商品	EP&L（環境損益計算書）の策定
☐	廃棄物（ゴミ）の削減に貢献する仕組み又は商品	伝統工芸品
☐	真庭の資源活用	

自然共生アクティビティについて

“GREENable HIRUZEN”ではモノの販売やアクティビティで自然共生という価値を発信していきます。

これらは、価値を人々が実感でき、さらに外に向けての情報発信材料にもなります。

自然共生アクティビティにおけるメニューの考え方は大きく2種類あります。

1つめは、自然の恩恵をたのしむ・実感するようなメニュー（サイクリング、ピクニック、ハイキング等）

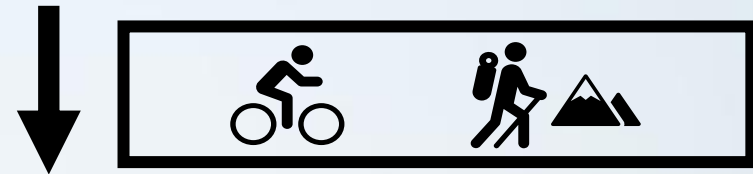
2つめは、自然共生という価値に共感し、保全活動に参加するメニュー（草原や森の管理活動等）

ただ楽しいだけではない、自分にも自然にも良いことができる、そんなアクティビティを作っていきます。

① “GREENable HIRUZEN”への来訪



② 恩恵実感メニューへの参加 ⇒ 価値の共感を促す



③ 保全活動参加メニュー ⇒ 取組への参画を促す



自然再生協議会について

自然再生協議会は、自然再生推進法に規定された、自然再生の推進のための協議を行う組織です。現在全国に26の協議会があり、自然再生を実施する仕組みとして機能しています。

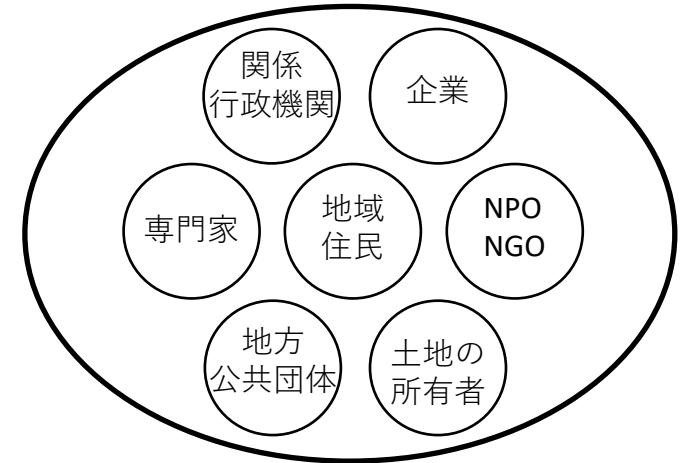
協議会は、NPO、民間団体、地域住民、土地の所有者、専門家、関係行政機関、地方公共団体等の多様な主体から構成され、構成員は互いに協力して自然再生の推進に努めます。

自然再生協議会では主に

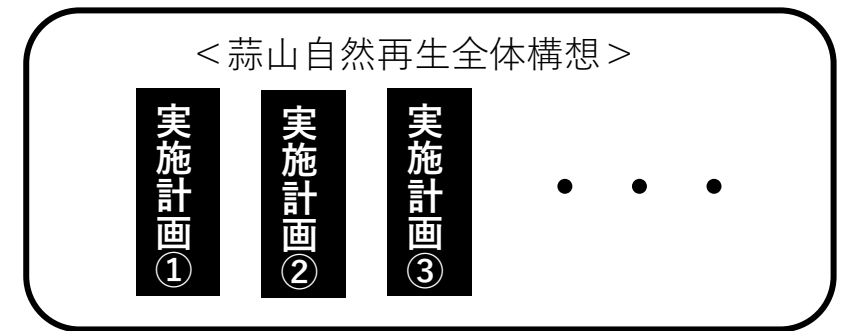
- ・ 自然再生全体構想の作成
 - ・ 実施計画の作成
 - ・ 自然再生事業実施計画の案に関する協議
 - ・ 自然再生事業の実施に係る連絡調整
- を実施することとされています。

蒜山地域では新たに自然再生協議会の立ち上げを進めており、この協議会をもとに、科学的知見を活かした自然再生を実行していきます。

① 蒜山の自然再生について、 「多様な主体」で協議する仕組みを構築



② 共通の目標や各自が実施する内容を 定めた「全体構想」策定



③ 科学的に意義のある自然再生事業 を実践できる体制を整備

本件に関する問い合わせ・リンク

■GREENable HIRUZEN について

<https://www.greenable-hiruzen.co.jp>

■CLTについて

<http://clta.jp/clt/>

■地域循環共生圏について

<http://chiikijunkan.env.go.jp/>

■CLTパビリオンの世界公募について

<http://https://www.city.maniwa.lg.jp/soshiki/40/39754.html>

真庭市役所 産業政策課

〒719-3292

岡山県真庭市久世 2 9 2 7 - 2

TEL : 0 8 6 7 - 4 2 - 1 0 3 3

FAX : 0 8 6 7 - 4 2 - 3 9 0 7

Mail: sangyou@city.maniwa.lg.jp